

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙 I 2章 10～16 節>

聖書の神様について深く理解できたとは、どういうことを言うのか？

## 1 キリストから聖霊に重点は移った？ そうではない、どこまでもキリスト！

先週の箇所(6-9)で、「この世の知恵」(6)と「神の知恵」(7)の違いを教えられました。今日の箇所(10-16)では、「人の霊」と「神の霊」の違いが語られています。私たちが自分の知恵を超えた神の知恵を重んじる中で、私たちが神様を深く理解できるように神の霊が導いてくれるのだとパウロは語っています。「わたしたちは、世の霊ではなく、神からの霊を受けました。それでわたしたちは、神から恵みとして与えられたものを知るようになったのです」(12)。ここで「神から恵みとして与えられたもの」とは何でしょうか？ 色んなことを勝手に考えてはなりません。パウロが考えているのはイエス・キリストによって与えられた恵みです。つまり、神様が御子を十字架にかけてまでしてどんな者をもご自分の下に招いて下さったこと、その恵みを考えているのです。

「霊」ということで、キリストと関係ない内容を考え出した途端、それは聖書の信仰の内容から離れたものになって行きます。キリスト教は「キリスト」教であり、「聖霊」教ではないのです(ヨハネ 16:13-14 キリストの重要性を理解させるのが聖霊の働き)。宗教改革者ルターが再発見したのも、このキリストの大切さなのです。今日の箇所では16節に、パウロのキリストを思う思いが現れています。「しかし、わたしたちはキリストの思いを抱いています」(16)と言ったのです。「キリストの思い」とは、御子イエスの十字架の死によって私たちの愚かさや罪深さが神様に赦していただける恵みを知った者として、そのイエス様の教えや姿に倣って生きる者になろう、という「思い」です。

## 2 信仰者に与えられた恵みの道 — どこまでもキリストを見つめて生きる！

それにしても、知識だけの霊だけの、抽象的な話のように思えるかもしれません。しかし、それは違います。コリントの教会に、「自分こそ神様について深く理解している」と高ぶり(4:6-7)、分派争いをし(1:11以下、3:4以下)、「**ねたみや争いが絶えない**」(3:3)信仰者がいたのです。それに対してパウロは、「**霊の人に対して語りかけることができない**」(3:1)と語りかけ、キリストに倣って生きるように呼びかけたのです。神様を深く理解したいなら、キリストの恵みに真剣にこたえて生きること。すなわち、高ぶらず、争わず、陰で他人の悪口を言わず、むしろ、自分の非を認め、相手をかまひ、赦すことに取り組んで生きることです。